
夢恋

ガラ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢恋

【Nコード】

N6367Z

【作者名】

ガラ

【あらすじ】

ある夏のちよっと切ない、ちよっと変わった恋のお話。

白い少女

この世には信じられない現象がいくらでもある。

俺は超能力だとか、宇宙人だとか、ましてや幽霊なんてものは微塵も信じちゃいない。

正しくは『信じていなかった』。

これは、俺が体験した、とても温かく、切なく、そして・・・悲しい話だ。

2006年

その年の夏は例年よりも気温が高く、俺はいつも以上に夏の鬱陶しさを感じていた。

普段は真面目に受けている学校の授業も、今日はなんだか乗り気ではない。

「ジェームズ一世が築き、チャールズに引き継がれたイギリスの専制政治を終わらせるために、クロムウェルはピューリタン革命を引き起こした。わかったか？」

なにもやる気がないのは俺だけじゃない。

世界史の授業はクラス大半の睡眠時間となっていた。

そしてその休み時間・・・

友人と四人で弁当を食べながら他愛のない話をしていた。

「今年の夏休みは彼女ほしいなあ」

俺はふとつぶやいた。

「そういえば前の彼女と別れてからもう一年よね。夏休み前に別れるとか竜也タイミング悪すぎだったよね」

俺を指さして笑っているのは桃瀬かおり、陸上部に所属している。このメンツで一番にぎやかなやつだ。

「まあオレとしては彼女がいただけでもうらやましいけどな・・・」

こいつは帰宅部で、松永勇樹。いまだに彼女いない歴〃年齢らしいな。

「まあでも、一番大事なのは本当に好きな人と結ばれることですよ。」

この大人しいのが吉田ゆり、美術部所属。

全くと言っていいほどに性格の違う四人で俺たちはいつもつるんでいた。

俺は三宅竜也、帰宅部だ。

「竜也はなんで去年彼女と別れちまったんだよ？」

竜也は憂鬱そうに溜息をついた。

「なんか向こうに好きな奴がきたらしい。」

「つまり捨てられたんだ。」

かおりの一言が心に突き刺さる。

「ほつとけよ！」

竜也は弁当をかきこむと、机の上に腰かけて窓の外を見た。

「俺だって好きでフラれたわけじゃねえんだよ・・・」

「あ・・・かおりさん謝った方が・・・」

ゆりが慌ててその場を取り繕うとするが、そんな努力もむなしく

「だって他に男作られる竜也がいけないんじゃないんじゃん。」

今の一言で竜也の心は完全に砕け散った。
竜也はうつむいて動かない。

「お、おい竜也！気にすんなって！」

「勇樹、放つときなつて。」

「おまえがやったんじゃねえか・・・」

そんな、いつも通りの昼休みだった。

「じゃ、また明日な！！竜也！！今年は彼女作るぞ！！」

そう言つて勇樹は竜也と反対方向に歩きだした。

すっかり長くなって、まだ明るい空を背に竜也は家路についた。

町にはそこらじゅうにイチャついているカップルがあふれていた。

「（リア充爆発しやがれ・・・）」

竜也はそんなカップルにイラつきながら、商店街を抜けて路地に入つた。

路地を抜けると、この辺りでは珍しい日本家屋と、その隣今風な一軒家が建っていた。

竜也は一軒家の扉を開けて中に入った。

「ただいま。」

夕飯のにおいが鼻を抜ける。

竜也は階段を上り、自分の部屋に入った。

ドサツと音を立ててベッドに横たわる。

「ふう・・・まったく・・・かおりのやつ・・・」

竜也はそのまま静かに目を閉じた。

「夕飯まで・・・寝るか。」

そう言ってから意識が無くなるまでに時間はかからなかった。

そこはいつもの我が家だった。

しかし、なぜかもやがかかったように視界はかすんでいた。

家の中に入る。

家の中に広がるのは漠然とした違和感。

しばらく家の中を歩きまわるが、家族の姿は見られない。

自室に向かう階段に足をかけたとき、

違和感の根源が自室であることに気付いた。

恐る恐る足を動かし、階段を上る。

永遠かと思えた階段もついに終わり、

重く、冷たい木製の扉が目の前に立ちふさがった。

取っ手に手をかけ、ゆっくりと扉を開けた。

その瞬間もやが激しくなり、自室からは風とも何ともとれぬ何かが強く流れ出した。

その流れに吹っ飛ばされる。

「んああ!!.....」

気付くのと竜也はいつもの自室のベッドに寝ていた。

「夢・・・か。」

夢にしては気味が悪い。

竜也は額の汗を拭くと、起き上った。

「・・・なんだ、この感じ。」

自室に広がる独特の違和感。

これは夢ではなく現実のはずだが・・・何かがおかしい。

竜也は時計を見ると、深夜2時。

「くそ！！飯食い損ねたか！！」

この違和感は長時間寝てしまったことによる疲労と、空腹に間違いない。

そう思い、竜也はキッチンへ向かった。

「つたく、母さんも起こしてくれよ・・・」

そう言いながら竜也は冷蔵庫を開けた。

「・・・」

冷蔵庫の中にはきれいな空白。

「なんでなにもねえんだよ！！全部食っちゃったのかよ・・・」

食事を諦め、とぼとぼ自室へ戻る。

自室の扉をあけると、ベッドにまっすぐ向かった。
しかし、竜也はそこで立ち止った。

「なんだ・・・これ・・・」

なんと竜也のベッドの上にりんごが一つ置いてあったのだ。

「誰がこんなもん・・・ってか、どうやってこの間に・・・」

拳動不審なくらい周りをキョロキョロ見渡してもそこには誰もいない。

「気味が悪い・・・一体誰がこんなこと・・・」

「あの・・・」

背後から突然声がした。

「ぎにゃあああああああああああああああああああああ！！
！！！！！！！！」

「きゃあああああああああああああああああああああ！！
！！！！！！！！」

竜也はありったけの大きさを悲鳴を上げた。
と同時にもう一つ悲鳴が上がった。

竜也は慌てて後ろを振り向いた。

「お・・・おまえ誰だあ！？」

竜也の視線に飛び込んできたのは、白い浴衣に身を包んだ同じ歳く

らしい少女だった。

少女はひどくおびえているようだった。

「と、とてもおどろきました・・・」

「そりゃこつちのセリフだ！！ってか、おまえいつからここに！？ってかおまえ誰だ！？」

竜也は慌てながら早口で問いただした。

少女はその声に目をつむっておびえ、その場にしゃがみこんだ。

「そんな・・・大きな声を出さないでください・・・」

「わ、悪い・・・」

とつさに謝ってみたのはいいものの、明らかに悪いのは自分ではない。

真夜中の自分の部屋にこんな変な格好をした少女が侵入してきているのだ。

これは明らかにおかしい。

とりあえず落ち着いて、質問を投げかける。

「おい、一体おまえは誰なんだ？」

少女はこちらをチラッと見た。

「私は、ユキといいます。」

ユキという名前なのか。

とりあえず警察を呼ぶのは少し待った方がよさそうだ。

「いつからここにいるんだ？」

ユキと言ったその少女は落ち着いたのか、静かに立ち上がった。

「いつから・・・それは難しい質問ですね・・・ずっと前からです。」

やっぱり早く警察を呼ぶべきか。

「ユキ、なんで勝手に人の家、しかも俺の部屋にいるんだ？」

「なんで？それはもっと難しい質問です・・・」

ユキは本当に困った顔をした。

この顔をみるかぎり、彼女にとって本当に難しい質問だったようだ。

「信じていただけないかもしれませんが、私は・・・ユキは・・・」

ユキは一息おいて言葉を発した。

「幽霊なんです。」

こうして、俺とユキの奇妙な夏が始まった。

幽霊との出会い

「私・・・幽霊なんです。」

目の前で突然謎の告白が行われた。

こいつは本当に頭がどうかしているのではないか・・・

「バカ言ってんじゃないよw」

幽霊？何言っただか・・・

そんなもんがこんなはつきり見えるわけがない。

「そんな！私、嘘なんてついてません！」

「どうせドツキリかなんかだろ！？カメラどこだよ。」

そう言っただけ俺は部屋を見渡す。

ユキは俺の前に立った。

「見ててください。」

そう言うと、ユキは閉められたドアに向かって歩いた。
というか、歩いてはいない。

ユキの体は浮いていた。

そして、ドアに触ったかと思うと、ユキの体はドアをすり抜けた。

「あ・・・すりぬけた・・・」

俺は呆気にとられた。

え、本物なのか？こいつは。

本物の幽霊が何かの間違いで俺の部屋に住みつき、
何かの間違いで俺にはこいつが見えている

ということだろう。

「ってことは、ユキは本当の幽霊なんだな？」

ドアからすり抜けたユキの顔がひょっこり出てきた。

「はい。幽霊のユキ、と申します。よろしくお願いいたします。」

そう言ってユキは頭を下げた。

「よろしく。」

全く奇妙な光景である。

いきなり現れた幽霊の少女ともうなじんでいる自分が不思議であった。

ただ、俺に見えるものは彼女が幽霊であることを物語っている。

「で、なんでおまえは死んだんだ？」

「!!!!.....」

ユキは急に黙った。

どうやらいきなり地雷を踏んでしまったようだ。
やってしまった。

ユキはうつむきながら静かに答えた。

「覚えて.....いないんです。」

ユキは顔をあげて続けた。

「幽霊は死ぬ以前のことをほとんど覚えていません。なぜ自分が死んだか、生きていた頃の自分のすんでいた場所、子供の頃の記憶、幽霊になる要因となった未練、全て。」

「死ぬと同時に忘れちゃうのか。」

悲しげな表情を浮かべてユキは答える。

「はい・・・」

ここで一つ疑問が浮かんだ。

「なんで俺にはおまえが見えるんだ？しかも急に見えるように。」

ユキは目をパチパチさせた。

ユキもどうやらわからなかったようだ。

「たしかにそうですね・・・」

「で、とりあえずおまえは成仏してえのか？」

「そ、そりゃあ幽霊ですから。一応。」

ユキはぺったんこの胸をピンと張った。

「ん、わかった。とりあえずおまえが成仏できるように俺も協力してやる。死ぬ前の未練が満たされればおまえは天国行けるんだろ？」

ユキの顔は明るくなった。

「はい！」

「で、そのためにはどうすればいいんだ？」

「あ……」

はいきました。

どうやらこれは本人も……

「わからねえのかよ!!!」

「大きな声……出さないでください……」

幽霊を成仏させる方法なんて知らんぞ。俺は。

「どうでしょうか……」

「とりあえず、生きてるときの未練っていうくらいだから、この世界で体験できることをなんでも体験すればそのうち目当てのものにたどりつけるんじゃないか？」

下手な鉄砲も数打ちや当たるってね。

これが一番現実的な方法だろうな。

……こんな不思議な生き物、いや、死に物が部屋に住みついたんじゃない、落ち着いて日常も送れないからな。

「じゃあユキ、とりあえず明日から俺と学校に來い。そこでいろんなもん見せてやる。」

「ありがとうございます！」

「だから、早く思い出してくれよ？何に未練があるのか。」

ユキは心底うれしそうだ。

「それと！！外では俺に話しかけるなよ？おまえは他のやつには見えてないと思うから俺に話しかけても問題ないけど、俺がおまえに話しかけてるのははたから見ればただの独り言だ。気持ち悪いだろう。」

これだけは気をつけなければ。

「はい・・・」

こうして、人間と幽霊の奇妙な共存生活が始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6367z/>

夢恋

2011年12月21日19時48分発行